へ 4
4354
2

拌ノ郷ノ書菖兼画

ちまこ乱石ふくろ

乃下に来るを被の係格

えぞ　俚言　トウモエウ

えふしぬるこころみよ命あらハ我やわすらるる君やとふとぬと（コヽロミヨワタシガ忘ルカオマヘガトハヌカドウモエウシレマ）

えしも　作る　日上

拾いせ抱
ふきぬるくさは忘れしを忘れハなほ恨つしわすれてられしよ（ドウモエウワスレ子ハ恨ナガラヤツハリ恋シウ思フロイ）

えこそ　えやハなしいとその下やハの下ふいふへし

かつ

うかかひの辞くは事いふもまされとかとやともハ
よし何くても不至被りて可集集ともやといふべき
不をも大方ハかといへり得しそのうち久へ子つくしふ
いそうたとへハ人よむろひて我の見ハ男か女かと問
と見ハあやふしやとこふものこともしかハ疑ふ
なかなかまくやハふりふきなる事をとふめく
疑ても外しと失悟まつれさりし

故 宍光清風氏 大正十三年十月三十日 宍光華氏 寄贈

へ4 4354 2

古　秋の月山へさやかに照せるハおつる紅葉の數を見よとか

日　夕されハ人まつ屋子打拂ひ嶺むるしたか何る事か

手　いつまてと佐保の河原をかよひけんさてこそ定めるをそはしもかけ

かハ　此の歌新古今集の頃より中より見いれたるまあり一ふしありてをかし

新　きりきりすよさむに秋のなるまゝによはるか聲のとほさかりゆく

日　うつりゆく雲にあらしのこゑすなりちるかまさきのかつらきの山

日　明ほのや川瀬の浪のたかせ舟くたすか人の袖の秋きり

かとうたかふ格

古　去年の夏なきふるしてし時鳥それかあらぬか聲のかはらぬ

於　津の國乃何波あらそひたつら因ハ芦か苗のもえてみつら收

かな　是ハ反語の辞といふて直つよくいふいひなるなり



詞　思ふ思ふことをきかへくらふれハ信太の杜乃千枝ハ數かハ
千枝ハシゲキ物カシゲキモノデハナイ

古　人目もるわれかハあやな花すゝきなとかほに出て恋すしもあらぬ
人目モルワレカハワレデハナイノニ無益ナコトヂヤ

かハ　是ハ反語の辞なり　俚言　アレハソレヂヤガ

日　思へとも人目つゝみのたかけれハかハと見なからえこそわたらね
アレハソレヂヤガト見ナガラ人目高ケレハエウワタラヌ

かハ　是ハかのうへのかハをはりかハの字をかれしとみてよろし

新　年毎にせきとめかねしゐのもとをへてかたしめぬ乙子は後とはいへ今年

十五百　夏艸てる日にゐて神乃心そハ涼しかれとも生えるひくらし

かな　俚言　タレハ

古　ゆくりなくもあらはあかずもあらはそ思ひぬる中そ逢けなりけり
ミタレバ近カッタ

かれ　是ハかれよ歌の意の外の係といふ情をいへるかなるよきにて感歎の情をのへる辞なりさる我[illegible]

よみ字のとゝのはぬ所を補はんとてかくといへるなるべし
近世の人これをしらざればいかゞせん。ともかくもなきかなうへ

古 女郎花うしろめたくも見ゆるかなあれたる宿にひとりたてれば

日 寐ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな

日 吉野山あらましものを逢坂の関のこなたに年をふるかな

於 うきふしの[illegible]せぬ物はおれりけり山したはなの[illegible]

此の意なり
是を昔より感慨の辞のかなと云へり[illegible]
迄格なりもとの字なくてはかなと
なりぬ

古 涙川なげかれこそしてあぢきなく[illegible]たもとにもかゝりける物かな

日 空蝉のからは木ごとにとゞむれど魂のゆくへを見ぬぞかなしき

日 つれなきをおもひしのぶのさくら花とにもかくにもかゝる涙の

かなも
かくいふ感慨の意のかな文字の上によりて大かたかなと
同し格なり然れどもかなはいふべき所を大かたはかなとはいふ

日 霜八度おけどかれせぬ榊葉のたちさかゆべき神のきねかも
カマア

日 見てもまたあふよまれなる夢のうちにやがてまぎるゝ我が身ともがな
カマア

於 足引の山とりのをのしだり尾のながながし夜をひとりかもねむ
因にいふ古今集より今までも咲く所をかねてよめるはこのかなをよめる事とすべし

めのかも
俚言 何ウカマア

古 山科の音羽の山の音にだに人のしるべく我こひめかも
ココロカマア

万 立花の下ふく風のかぐはしきつくばの山をこひずあらめかも
コヒズニアラウカマア

かれ
是は疑ふ心の辞なりかれやもかれとも又かはかてはかとも云ことぞか
俚言 何タイ物ヂヤ

古 かくしつゝとにもかくにもながらへて君が八千代にあふよしもがな
ドウナリトモシテ長ラヘテ君カ八千代ニアヒタイモノヂヤ

後 思ひ寝の夜な夜な夢にあふ事をたゞかた時のうつゝともがな
ヨルヨル逢フトミル夢ヲ只片時ノウツヽトモシテミタイモノヂヤ

丈木 いかで我つれなき人にすてられて舟のうき世を離れしがな
ハナレタイモノヂヤ

古 耳なしの山のくちなし得てしがな思ひの色の下染めにせむ
エタイ物ヂヤ

後 いせの海にはへる海人ともなりにしが浪かきわけてみるめかづかむ
ナリタイモノヂヤ

古 あな恋し今も見てしか山がつのかきほにさける大和なでしこ
アヽコヒシ今モミタイモノヂヤ

甲斐がねをさやにも見しがけゝれなく横ほりふせるさやの中山
甲斐カ嶺ヲサヤカニモミタイモノヂヤガ中山カ心ナクヨコニヨリフシテアルワイ

心がへするものにもが片恋はくるしきものと人にしらせむ
心ガヘスルモノヂヤサカラヨカラウ

づのこ 是ハよきなど心づくしたと相あり
俚言 何ヨリ

あすからは若菜つまむとしめし野に昨日も今日も雪はふりつゝ
アスヨリハ

春風は花のあたりをよきて吹け心づからやうつろふと見む
ココロヨリ

是ハ [illegible] 故とカムガラ
とあるゆゑ思ひあるべし

又一種のから



新 逢坂や梢の花を吹くからに嵐ぞかすむ関の杉むら
フクユヱニ

古 吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ
フクユヱニ

拙うら
拙からの意にして 古今集の第一本 是をゆゑの意なり 是もゆゑの意なり 又是もゆゑと見るべし かれとさして 或ハ文字なとの例に叶ふなり
やしさし

古 ほとゝぎすながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから
思フ物ナガラヤツハリウトマシイワイ

拾 くれぬとは思ふものから藤の花さける宿には春ぞひさしき
オモフモノナガラ

何が何ぞ
是ハ何ぞいはれしもと 何が悲しさ 何がうらめしさ 何がもどかしさといへる時ハ何ぞ思ふ
いかなるさまかかなしき也
俚言 何カ何ヨ

古 [illegible]
ミルガ悦シイコヨ

後 [illegible]
ワリナイコヨ

かな

万葉集ニ願の字をかきてかなとよめれハ願てよむへきにや
と宣長大人ハいはれき又ハ称とよみしより富士谷成章ハ
かなと清てよむへしといはれたりしかれとかなに
いふへきにやさてよめる歌ハて考ふれハ願ふ意ときこえたり

俚言　何ヤウニ

古 さくら花散かひくもれ老らくのこむといふなる道まかふかに（道マガフヤウニ）

月 をとめこのあれしの山の山姫にとくもるかに山うつしせよ（ミルヤウニ）

万 梅の花それとハちらはちるとも丹にしなし人の来まさんころかに（ミルヤウニ）

かし

是ハ用語の辞をうけて上よりいふ事を正すところ
とくにかりしれとかとよりあり感慨のなとそこそえ
おもて大かたハあかれしうへし

古 袖ひちてむすひし水のこほれるを……
とのこかし梅盛れる古のたとへに申かれとこつせよ人のいふし
後拾 こゝろにもあらてうき世にしるしもなき心の雲のかかるとも



秋 あまくたるめのつとよい結よしの一文字の殺ささなかんといへれ
とりきよけれハへてあるよ
とくかれさうこし夜の衣手お原のうれ秋の称さあ我
きいそ
三輪の井合ふうとし成るハ又はしそれ是ハくれの
俗格あるとしてさらし同しいふさ我万松ふ也社
歌偶　興などの字を充て書れハ新や云の辞より
とつかれらへまうれと古今集以後のハ大さをてはとき
新きま事はなし

歌のとも代ふおけるこそ

是ハ余情を含みたるなれと
何とそへてよへし

古 は国のたゝ波おもそれ白妹のきよ入るをあしたそのみこそ（コヨノミコソ オモヘトソヘテキクヘシ）

後 行田霜のはなさとしまハ頃ぬれとも心ハすゝの人のみとこそ（クモノ上ニノミコソ スメトソヘテ聞ヘシ）

体云としく結ひさとこそ

是か体云のうへナレトそへて
字格なり

新 人よする浜の田子のんハ我いふてましまさらハ残りもとうしやこと（ヲダマキナレトソヘテキクヘシ）

大和物
なけきこそ陸の川にかはる鳥。何てこの身と君はさらにむぞや　千鳥ナレトソヘテキクベシ

いひかけて浜そふこそ　地名に詞をいひかけて詠む。

新
小夜千鳥あけて揚くなる夕暮の月に枕やぬらさん

金
忘られて心つくしに今ぞ思ふ　そのむかしこそまちの松原。　近クナレトイフベキヲナルミガタトイヒツヾケタリ　タノムバコソ沽タレトイフベキヲ松原トイヒツヾケタリ

詞をいひかけたるこそ

新後拾
霜て枯あへきこ萩をすりの夕にさそはせる小夜の月影　ニケテコソオケトイフベキヲ霜ニイヒツヾケタリ

千
余所にくれとそれぬるれ君にこそ。今こそ思へと思ふ袖の雫を　君ニコソミスレトイフベキヲバヤトイヒツヾケタリ

まくらし　からしいまそあへるこそ

後
こほりこそてはれし　みどりの山の峰つきにおもしろきまて

古
秋の夜そ宿こそ詠まるらし里村毎に宵のこそなれで

新
ほのかしとまこそ宿にありてし。霞あきされけり



ものこそ　俚言　此ものこそあやぶむべき事也　何ウモシレヌ

古
ふらんれ後の心さへ我ふつつるぞふかくこそしれ人こそ。身もしれ　人ガシレラウモシレヌ

千
さみだれにぬまのあやめの根のぞ短くあるかな。　水ガニサウモシレヌ

後
桜花まれにふく見てむかれ外の上夜の間にかおしまれ　一夜ノウチニチラウモシレヌ

さらこそ　さもあらこそ　俚言　氷はいつれよりおしはかるべき事也　サウ

拾
朝白露何と別にと思ひ見む人をしもあはさてうらみるは気に。　サウミルデアラウ

金
露てるまそ夢をかりてやみにとさて忍びし人を待るは　サウミタトハシカタルチ

古
うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人目をよくと見るがわびしさ　サウモアラウデ

金
さもこそは都恋しき旅ならめ鹿の音にさへぬるゝ袖かな　道理ヂヤ都ガコヒシイ旅デアラウ

さもこそ　俚言　サヘ　カヘツテ

さもこその下へカヘツテと詞をそへて心得べしと宣長大人はいはれたり

長 なき人てまたなきもの思ひしに名残惜しき去年のわかれ ナゴリヤテガカヘツテユヒイワイ
子 ほとゝぎす又なくこゑをきかれつゝ待しよりそ猶わすられざりけれ キクヨサヘカヘツテ子ラレヌワイ
こえ今ぞ
俚言ドウモエウ
古 おもへども人目つゝみのたかけれは河と見ながらえこそ渡らね アレハソンダヤガト見ナガラドウモエウワタラヌ
一川あるとは今ひとつのそくる言ばなり故ニ
万葉に副共並の字をかけりよさへにとよめり
さく
俚言 マテ マデガ マデモ
古 夕されは手かさむる袖に秋の露さへそひけり ツユマデガ
日 天の川ふかさまさりて行く夏秋をさへ人目をもるとこそ思ひけれ ヨミマデ人目ヲモルトミルガワニイワイ
日 白雲に羽うちかはしとぶ雁の数さへ見ゆる秋の夜の月 カズマデモ
日 春雨の匂ふも見あれくに香さへうつりし山ぶきの花 カヤデガ

二十六

是に二つきのけち歎あり更にまたくとも言はれなりとも祢がふ事と 只俚言のごとくのみなり 俚言ナリトモ
だに
下 咲くまでそむの夜に成まり昔の秋よりの色にもぞけせよ
日 花の色は雪にまじりて見えずとも香をだに匂へ人のしるべく カワキナリトモニレテクレヨ
於 野 ちるをだにあはれといふを散る人の心まかせに山風のふく カナリトモ句フテクレヨ
以気子のぞんでいふで此身ものこりつゝあるとよりは思ひあはせん ソレヨナリトモノコシテクレヨ
俚言のまゝの心の外の事に
俚言 サヘ
日 吹くとに秋ぞ知らせで露ありて花を散れらぬ名のみ立つらん
後 春雨だにまつで鳴ある鶯のふるさとぞかわれ心なりけり マクラサヘセズニ ハルヲサヘマタズニ
古 なるやまき浦やはまちもつ世に鶯のなくはや鳴くよるかけ ウグヒスサヘナカスニアルワイ
後 その川後の名のみに志賀の浦なりとも立ちぬ舟出なりけれ ノチノ今日サヘ未イノニ

七

古
吹風を啼てうらみよ鶯は我やは花に手だにふれたる

此歌ハ一格なのものにて少かはれり　俚言　手デモフレタカ　ヨハセヌノニ

すら　俚言　モヤツハリ

後拾
君すらもまことの道に入ぬなりひとりや長き闇にまどはん

躬恒集
鬼すらも（オニモヤツハリ）都のうちと蓑笠をぬぎてやこよひ人にみゆらん

万
こととはぬ木すら（キモヤツハリ）妹と脊ありとふを只独子にあるが苦しさ

是ハ体言にのみつけり。ヽの字添りかはりつゝ
も必下の句中にはの字なくてはかなはぬ
ものなり　俚言　何サヘ　何バ

古
から衣きつゝなれにしつましあれば（ツマサヘアレバ）はる〲きぬる旅をしぞ思ふ

月
種しあれば（タネサヘアレバ）岩にも松はおひにけり恋をし恋ばあはざらめやは

源氏
君しこば（キミサヘコバ）手なれの駒に刈かはん盛すぎたる下葉なりとも

拾
名にしおはゞ（ナニサヘオハバ）いつまでかくもおもへる身のおもひのかひもあるやと

し

是モ助字のしなり体言をうけたるそのたぐ
ひの打合あれはしぞとかくかかはりて
助字となれるなり

古
いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし

後
君をおもふ心のうちもしら雲のたえずぞ人を恋ひわたるらん

古
ありま山ゐなのさゝ原風ふけばいでそよ人をわすれやはする

月
誰しかもとめて折つる春霞たち隠すらん山の桜を

日
歎けとて月やは物をおもはするかこち顔なるわが涙かな

その秋ふしぬるにかゝれとてしもうき世の中と思ひぬる

しも

是モしも助字となれる
といふなりおもしろくしてふけるあふ
れのはを下におけり

後
はしもたれものきくりにつゝれハ思ひそぬる山に入やされまし

後拾
女ニ呼びにおはりけれの〳〵に「しまあれにしろめさくに思ひぬ」

馬内侍集
君しもあれ道のゆきゝを定む人になある人へをかれしられく

しして

これにかく似るのけだ又ありけるハいづれ作るも用語体にして重語体にてかくも辞のかいのこして（かりして）などにおかくてかけたりけれよくしてなどして新川はけ小体にてこれハけりゆるをして俚言モツテの義にして此して（の）意いふハ美　するなり

新勅
いせの海の釣たよゆられよかひ〳〵てふあまそひの貝乃片思ひして

新拾
今よ礼つれなき中なり郎云ものいさつ文の定ためにして小りてのみしておかりしてなどりしてなしてふ小さを



葉をかさねてかけたる　拾

万
よしのなる夏箕の川乃川淀に鴨そ鳴なる山影にして

後
夏衣ハまだきのみして我妹の姿さらすまに頗そまになる

以の意にして

古
人文よとふきを人も物なくもハ音蘇りコモツテていさせうつて

後拾
おつけよ思ひやりけむ故さとの思ひ子シモツテしてまれるさしくらか

此かよ意して葉にして落葉にしてなくしなし我あ
また〳〵考ふるよ以の意ハ一つなりけれ説よりて我用語
重語の二体にをとよへかる後用ありてふ目にして月人して
害してなくしかくへくもあかぬまそ仲語よおつけよハ
かくへいらぬ辞なる単かてしるへし

しくとせしものとちあ

しくを左行四段の第二等よなる云の意のしれかくれる

なりもしハ左行下二段の第二等よりうつるゝかはるく
時雨もし荻原もし肖遊もしなとく變格左行の方
一等よう闕していへとも

左行四段よかけらる格

於 時の名もこゝろハ定まあらぬをいつてまどろむもしあるらん
堀川院百首 よしたゝよさてのみ社ハせむくゝろ思ひさめや秋乃末を

左行下二段よかけらる格

玉 つれるほとよちゝらちゝあん梅の花恋川かなく思ひおこせし。
千載 あきさく涼しかゝけりおなみまつらせ。あのこゝろのとは

左行變格よかけらる格

古 ませじとみむや川よせしてそきし神ハうけまても成よ何我
同 まう宿ハ道すあさき荒よなりつれあさき人を待とせしるよ



用語の体にかけらる格

古 ものをハうれあまよけれかつふ中すゝよ申よふるあかめせし身ふ。
同 やとりせし人のうとみら屋務さへしれがうよ衣身ふす居ひつゝ
ど

是ニ五種詞の第一等よかく形容詞中ハ
何のうへしとかふの辞なくてくかく有居の
辞よもかけらる
俚て 何マイ マイトオモフ

後 ふく風我たゞしの是乃さくふもの心く我りんるちらふ上と思ハバ
良行四段 ナルマイトオモフ
同 大かうよおも月なかりの袖よかれまさく色を風よますらせし。
左行下二段 カゼニマカスマイドオモフ
大和物 まるのかおひでとそありふ三つまつふ心の猶しなりけりと堪ぬ
絵行中二段 ヨヒハスマイ ヨヒコ子ハスマイ
後 竹の栢ハせじ。富のなりあるさけハあさいもしされそ
左行変格
和泉式部集 つらき人ハうきと世の中おいくらじと思ひまりさく付うさり行て
イキテハ居マイ 有居ノ辞ニカケタル知り

しらば　　俚言　何々レバ

是ハ上の言のしられバの辞のそひたると

古 もみぢばのしも草木に見えしらバ（ミタレバ近カツタ）うつりきと思はぬ中ぞあはれなりける

日 見れば子君何彼の浦よなりしらバ（アッタレバ）つきぬとやこの波の寄しと来まき

ぞ

ぞまま

そのや何の本合のぞにあれたる是ハさらしぬくらしのつらひぞゑけるは誰あぐらくらひらぬとひかくるふところなりぞまとりへるハぞ一感慨の言のまのそへたるて大やうかなる事旨べかりん

後 詠きけんとなしかるらみぞかる宿の尾花が末ぞ残るとぞてにて

拾 てうぶりよみてきこと一日へあるよハいかぞくりりふく嶺のゆりしぞ。

古 色よりも香こそあはれとおもほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも。

仁 ぬしぶらぬ香こそ匂へれ秋の野に誰が脱ぎかけし藤袴ぞも



ぞも　　是ハその字添てよむべし　俚言　ツレモ

新古 春字かされ風への入り月あれバそ。よむ（ツレモ）つましくなり見られける

千載 たぐひなくうき事にてえし宿なれど（ツレモ）ぞもなるハ悲しかりける

さぞ　　なしそのる言なり　俚言　サダメシ

後 思ひやる何れ何彼のしらさじて芦の葉根ハさ。ぞ（サダメシ）流るらん

続後 このはまバ絶えぬへまかへる山にもぢの言葉てさぞ（サダメシ）つもるらめ

もぞ　　あやぶむこころなり　俚言　何ウモシレヌ

金 まろ寝に濡てあまん山まくぶ事の糸くしのあらしもぞ（嵐カ吹ウモシレヌ）ふく

詞 秋山の清水ハくまじ濁れバやどれる月のくもりもぞ（月ガクモラウモシレヌ）する

ぞよ　　是ハあふと思ひぞ。丈よといふやうのこころなり
丈字れ有し芦荻毎稲葉などの風につひらけさり

後拾
こいしさはよそに見ることゝ思ひしをかはるばかりのうきよなりけれ

拾玉
思ひきやむかし逢見し誰（ソレヨ）にかはるそれ（ソレヨ）よ我日数をさもと（?）つらき夜の言

たれたがなどハ一般の言にてそれ〱の詞をおく
なにしなるをいはれハそのたがひのあたりなる言の
俗語をのみあし

# 誰

新
逢ふことは誰がためなればよの中に常なきものといひはなしけむ

大和物
あはれとも思ふ人のなきそれかつまりはたがまたとよりくれかりけり

土佐日
白妙の浪路をとほくゆきかひて我に似べきハ誰ならなくに

# 川

是ハ哉の辞とぞきこえたり
俚言　タコトヤラフト下へつれて心得べしと先哲
もいはれき

拾
七夕のと渡る舟のかぢの葉にいく秋書きつ露の玉章
イクアキカイタヤラ

金
夏の夜は月まつほどの手すさびに岩もる清水いく結びしつ
イクツムスビシタヤラ

是らの言乃つ字をかよはして上の一句
よく相そへるえんにきこえたるなり

# 川ゝ

古
笹の葉にふりてつもれるはらひかね袖み下に露の置てもほされぬ
俚言　ヒタブルニ　キツウ

万
中〱に君にこひずは枚の浦の蜑ならましを玉藻苅つゝ
君ヲコヒムヨリヒタフル玉モヲカラウモノヲ

次上二首はつゝといふべきにはあらぬを哉
一首ハおもひゝるなり但し句中にあれハなげ
きつゝの意也世にいふつゝとは異なり
俚言　ナガラ

古
山たかみ見つゝわがこし桜花風は心にまかすべらなり
ミナガラ

日
音羽山おとにきゝつゝ逢坂の関のこなたに年をふるかな
キヽナガラ

# てへ

是ハトイヘの縮りたる辞なり

古 今よりはふべき人も思ほえず人は年を経てつきせりてく。（カドサセリトイヘ）

於 昔より名高き文字の香の城は花のみちよりて落しまふてく。（以落ニマルトイヘ）

てふ

是ハトイフのつゞまれるなりふるくはとよもちふ ともいへり

古 常夏の笑りぬてふ（ヌラトイフ）常とめの花打てかまへむ花ちつくふやと

万 住の江にゆくてふ（ユクトイフ）道に昨日見し恋忘れ貝ことにしありけり

日 さゞ波のなみくもりよするねれはまでぞふるてふ（フルトイフ）ゝへりものある皆

てば

是ハタラバの意にて未然状の辞なれハ必下ノ辞もこの格にかへりていふべし。又さらぬ未然の語をうくる格にてもあり次下のてもとしてよむとまがふまじきなり

古 うたゝ寝を袖にうつしてとゞめてば（トヾメタラバ）夢にはせぐしとま取り入るゝに

業平朝臣日記 口あかせしとこそかりたる鶏あらはれてば（アラハレタラバ）。いかに悔しからまし（アラタラバドレホド悔シカラウ）

万 秋萩に白くある露の置ぬれぬとも君が浦舟の綱しとりてば（ツナヲトリタラバウレシカラウ）





ては

てはのはゝ文字是ハ濁りてよむべしさのたいふゝ助字と見てよろしかるべし

古 月みればかひあるがハ千代ふりてこそ父母ては思ひ出せよ

日 離れてはいつよせの山の中よ居るよしみたつ川のよしや世中

で

是ハズレテのつまれるなりと哉人もいはれけり

新 梅のみたづめてちりぬ梅の花さかる春なきる人ありとしらで

まで

あつまでの何ほどまでといふ事ハ何ほどゝ云ふ意ハ同じ是もまた文字ハこゝまであり

里ゝ　何ホド　クラ井

古 秋たれハ山もとよむまで（ホド）なく鹿に我おとらぶ泣くや稲ぬらしよハ

日 さひてかけ人をとゞめむさくらもちられもとなくと惑ふまで（マドフクラ井ニ）ちられ

と

といふもて載る句を下へいひつゞくる辞にて六様句の前三句等まかく三転を語く辞よ八才一転よかく

又ぞや何の語のらる大ハ三等のきたるかはれ四等まよ

又活用辞の第二等にかゝる次々のあるべし
ならひてしるべし

古 打つれ渡る袖に秋の月のへ梅のそれありと知ゆゑにしられてひとつ乃所なく

同 ながしとおもふ心はなくにはかなくもなれし人めにめぐりてし

形容詞第三等 （麦格良行第三等）

同 ぞや何の才合の下にかけゝると

同 「ながめ見れと思ひむすぼれさてもなほ「うき」と世をおもひらん

同 一目見し君もやくると「さてもむらふは待てでもちらばちらなん

ぞや何の係に結詞とおもてかつけにといふけたる格

後 みるめ刈るぞ「うらみになしときゝ玉藻をすくや源ひかへ

於 生名ヲ世ト称 名をのみ松と作との末の世をとつれえしと君のそれ人辞

消えて追かへるふへつくとなりぬ見れの涙にのそふ手の



詞をた常まて意代句中に含ありて此格乃しど

於 世中にあらましかばと思ふ人なきこそおほくなり行その花

アラマシカバヨカラマシトハテキクベシ

古 ちりぬとてをしむ人のとてぞ絶むさてもぢつれと道しる人もすれちれ

同 忘草何をたねとおもひしはつれなき人の心なりけり

タダフカラムトイヒテキクベシ

とまりの意乃 して

後 奥山の桜の花にちの友ふたき吹いりてくるべし。

イツレガミナナランテヘテキクベシ

かけろふ日絶 嵐の又吹める宿にはなきにぞとしとぞえぬまれ

トモ

しらば

六種詞の第二等にかゝり未然の事一字

トモ

あふ事よりの時の辞なり

古 思ふにはよらぬもなれやまふはせ梅くなる下ひも

同 六補の山ふ待らん年ふと。なかぬ人にあとどとふもへで

じらば

六種詞の第五等と活用の辞の第三格にかゝる 雖の意し

古 おもへども人目づゝみの高ければかはと見ながらえこそ渡らね
（思フトイヘドモ）

於 うぐひすのあなかくれはて梅が枝に天ぎる雪はなべてふれれども。（フルトイヘドモ）
しらぬの辭よかけるなどこそ

古 人ふるさと里残いとひて、しらどもなほ雨に濡れし袖とさへぞ誰むかしの名よ

日 袖ぬれて花ちらしつとも、なほ雨に濡れし袖となりぬ

日 なぐさに 俚言 何トスグニ たなびきの羽はたびむと先指もへそれさり

日 冬されば山のなきまくは稲ある才ぞ宜まさりけるに（ナクトスグニ）

日 つたの門より吾あらせぬみ鳴くべきは吹かせよて、もとまれる字（キクトスグニ）

新古今集 今年よりわが宿の鳴くべきに、とゞの鳴る宿より逢ひけるよ

なあど
この花のあらぬ花は何ぞもしよそにまあ拾ひなる字
こそ残をおきてどこうけなるなりとせへ指しも

らめど
つれなさを物ぞと思ひたる。おはれとはふべきは時より
ぞ残をおもひて見えなれども、くひつゞき
なめし

古 春毎に花の盛はありなめとあひ見むことは命なりけり（アラウズレド）

日 色も香も同じ昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまりける（サクデアラウズレド）

日 他国の何彼のりめあまさるは志方もよらぬ人しるらぬ人や（シルデアラウカシリハスマイ）

日 たらば
玉緒ノ詞ノ中ニ二等ニかくまなの字あらば
まゝわいふ辭也 俚言 何タナラバ

日 春の夜やかそとしくひまもて鳴る日ひと人のものしらぬ下なりなば（チッタナラバ）

日 あかでてふみあけなばはるの日の長くや人をつらしと思はん（アケタナラバ）
俤てうかしゝ思ひとへてこそ下にまし。又はまし名と

ならば
俚言 デアラウナラバ 何ウ ウノニ
しろけさり

古 をとこ山のぼる人ならば都のつとにいざといはまし」
（ヒトデアッタナラバ都ノツトニサアユカンセトイハウノニ）

古 あの上にかへる年の君なくばはつぞ何かはしらましの哉 イハウノニ
後 君が為落る涙乃玉ならばつらぬきとめて見ましものを 玉デアラウナラバ貫キトメテミセヤウノニ」
金 まつ人乃来まさる月ならばめづらし秋をも見るべきものを ミルデアラウニ」
なくて
なくての語意なりん宮長大人云たなむの云のかはりなるべしといへるはさもありなむ
とききかへさまほしきなり
古 おもへどもえし堪ずまでひまで立わかれなば ナクテ マガヒナクテ
後 君が為恋の苦しき浦となるべき カレナクテ
歌 中にふきこえゆく消なで
なく
是ハ分の意ニてまでつるべき事なり上古乃
ことばなり キエナクテ
古 夏山のなくほととぎすなれは今日やくはしき 今日ヤクナカレ
日 まてりしらぬ

な 是亦感慨乃辞なり
時 みなと浅きまでまさりと思ひしを涙ぞりけれ光乃涙をそ
古 人目もるわれらかあやれど落ちぬ涙ぞ
なくふ
是ハぬの延ぞたなんかのなるべし
あり 俚言 何又ニ
万 秋山の色にかなしき
日 るみなの大宮人のかなしきたのよ舟に
古 何ぞは 何ヂヤソレハ
何ぞとは 俚言 何ヂヤソレハ
古 かへる山何ぞはありてあるかひはきてもかへらぬ
日 今やさし何ぞは 十二ヂヤソレハ
かやの辞 かやの辞ならば是は何の
あやぬ横に 俚言 何トイフタヤラ
於 何とかや 何ト云タヤラ
何とかや

新 何ぞもや家に生るゝ子の名よそれはまたぐふかくりなりたり（ナニトテカタヤラ）
何せんに　俚言　是もせんとうけられハかくりに何の詞をおかれ（ドウレヤウリ）
古 あふ道の形見とあられハ何せんにてよんの女ぐさあれくれ（ドウレヤウリ）
後 何せんはへいるみる人を思ひ此世も仲付るほ屋をとかへるみにて（ドウレヤウヾリ）
ね　俚言　是ハ新今の辞にて五種何の引ニ字すかく（テシマヘ）
古 恋ひ死ねとするわざならしぬばたまの夜ハすがらに夢に見えつゝ（シンデシマヘ）
手 よしさらば後よまで稀ぞかく夜関もよく月残志のかかりぞ（クチテシマヘ）
於 あかる残月りふぞへてまつ国ハルかり事よなる稀しく出り（ナッテシマヘ）
ねば　上りくるの係りとおかげてねぞとかへいひつけらるなりたなめどもの下にとり合せ迄
俚言　又ニ
古 天の川浅瀬しら浪たどりつゝ渡りはてねば明ぞしにける（ワタリハテヌニ）



新 常向のひだりにてたぐかほす稀ぞ小松が原り虫すむ残りふる（カスマヌニ）
万 秋さればかりあふ祝ぞ武蔵野の所の風ハ秋さりしを（アラヌニ）
の　俚言　何イ　チヤワイ
つねのの八体用辞ふかけて詠ぐる近寄ら今まにあぐるハつかひぞみてかたりといひたせりきはぶべきにをのといひふえて感慨のやうそてむすべる格
新 ふりぬる志の小笹の露ぞ枝もられのかやや一夜をかりけり（ハカナイツユヂヤワイ）
詞 鶉なく篠の志らむ荻がそれまで残の風が乃るさの世や（有ガタイ世ヂヤワイ）
の　是ハ如しと何をのるまくいれて咏格し
古 よしの川いは浪たかく行水のはやくぞ人を思ひそめてし（ユクミヅノゴトク）
日 夕月夜さすや岡辺の松の葉のいつともわかぬ恋もするかな（マツノハノゴトクニ）
の　是ハ体でよりかけても何ぞと云ひける格し
俚言　何が　何サ

古 秋萩をしがらみふせてなく鹿の目にハ見えずて音のさやけさ。 音カサヤカナ「サ

後 夕されば旅よゆ　露のひかりして妻恋ひて鳴る鹿の声かなしき。 コヱガカナシキ「サ

の

是ハ未定の辞よかなひてかく未定の辞とハいへどもまちハいふ

古 君やこむ我やゆかむのいさよひに槙の板戸もさゝずねにけり

新 忘れじの行末迄ハかたければ今日を限りの命ともがな

續後 見し人もなきが数そふ露の世にあらましかばの秋の夕暮

の

是ハ前句の上より上へかへりてかけあふ格なり

此のハ既よ上よいへることをくりかへし文字をそへたれど

ふたゝびの辞よあふたる故の異なり

古 吹まよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人のこゝろの

若丹集 [illegible]

源氏物 あらはれていとゞ浅くもみゆるかなあやめもわかずながるゝ根の

ば

これよ二種あり既よいへるとせざるとなり

新 [illegible] 加行四段ノ第一等

上種詞の第一等よかけるハ[illegible]

千 思ひ出[illegible] 加行四段ノ第一等

ば

是ハ五種詞の第五等よかく既よあることをいふ[illegible]

古 山里ハ冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば 波行四段ノ第五等

月 しのゝめのほがら〳〵とあけゆけば己がきぬ〳〵なるぞかなしき 加行四段ノ第五等

せば

古 世中よたえてさくらのなかりせば春のこゝろハのどけからまし ナカツタラバ

よまあるまじきことをあるとしていふ格也 但 何タラバ

月 忘草種とらましを逢ふことのいとかくかたきものとしりせば シツタラバ

是ハましせばの格語なるむねハ次よあり

ませば

後 [illegible] イハヽヽタラバ

後
等閑にまた宿りもとへのあふまでせば袖さめすよ　袖ハ掃ハざらまし
アツタラバ
これハ四の句中二段下二つの三種の詞の第二等なかく

み。
俚言　何タリ

日
神無月ふりみふらずみ定めなき時雨ぞ冬の始なりける
フッタリ　フラナンダリ

後拾
何波深浦ふくせよ浦にたつ八角くむ芦のうへくみゆめ見えなみ
四段ノ二句　ミエタリ　ミエナンダリ

同しみなかしとのみとかの辞ハいひかへてつけたる格
下二段ノ二句

躬恒之集
足引の山のかたへえみ見えみ見えずハ雲かくれて雪のふり川らかくれなしけり
ミエタリ　ミエヌハ

み。
是ハ形容詞の第一等なかく
俚言　何サニ　何ユヱニ

古
山たかみ見つゝわかこしさくら花風ハ心にまかすへらなり
山ガタカイユヱニ

同
都人いかにとこそは山たかみはれぬ雲井にわぶとこたへよ
山ガタカイユヱニ

同
一かたしに思ひハありとはとひがたみ雨ハふりつゝ晴れける
トヒガタサニ

新
ほのか々々有明まゐるや田面のかりがね寒み秋ぞくれぬる
田チヤノ三雁カ音ノサムキユヱニ



なん也

五種詞の第三等と有居の辞の第二等截断言とつかく因に不清審記に志毘賀波多傳尓都麻多底理美由とあるも哉武くあしく心得て月ハ由の辞ハ前よりの理よりかけたれバいつまでもあるぬへしといひ仍て連るはいそく不審記の弁ハ四段の活語の第五等に有居の辞のかかれるその三等の用をとるけれとてもて五種詞乃第三等とひとしく截断にてとるけれる格なり
但しかるゝ也ハして別弟につづけるがなんあるをいひたてゝ
なん也　舟出せりとも也ハ辞をてなかがなんえ　舟出して見がえあれバ心を変へ廣様あるもとして

於
古
雲の上に今宵の宿なども月の舟ほしの林にかくるゝなん也

讀古
さよ中と夜ハ更ぬらし雁かねのきこゆる空に月わたるなん也

あなし吹穴師川きり弓月が嶽に雲さへ消て檜原の上に月見ゆるなん也

有居の辞にかけるなん也

古事清寧記
汐瀬のなをりをみれハ遊びくる鮪がはたてにつまたてりみゆ

万
あまをとめ玉もとむらし沖つ波かしこき海に舟出せりみゆ

みとつよきゝへ今一例あるやうのふみしましたよへいたまゝ
小ゆへりといふ今一例有ゆへる旨のありと出をよらめし

続古
明石潟しまもとかけて見わたせハ霞のうへに沖つしら浪

新
筆たてゝ只家のことを佛しておもふ心の奥なみえよしのゝ宿かな

何せゝな

俚言
周りふちをとゝまりしてふはしく見せよハ見せんなるべし
何セヤウ

千尼
人まちれ見せよ咲せよ萩が花咲夕かげ乃日くらしの声
ミセヤウキカセヤウ

千五
本あらの小萩の下枯ふすくむしの声をきく夜は見せよ咲せよ

是ハ感慨の意の辞なりけれぞまやまかな
めづらしめやまなどもあり

俚言
何マア

古
あしへよりすゑをさしてゆくのやと思さりまは我身戀しも
カナシイマア



日
春日野の雪間をわけて生ひいでくる草のはつかに見えし君はも
キミハマア

日
色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも
ウメヂヤヅマア

日
山科の音羽の山の音にだに人のしるべくわが恋ひめかも
コヨウカマア

や

こゝなれはなきゝのふもち終あらうその家よりうつし出せる
ありしためてもれへし

地名よミつけるや

古
大原やをしほの山も今日こそは神代のこともおもひいづらめ

日
さゝ浪や比良の高嶺の山おろしに紅葉を海の錦となしつゝ

その所の名につゞけたるや也 是ハのとゝ全きをやとふ也

新
三島江や霜もまだひぬ芦の葉につのぐむほどの春風ぞ吹

続千
山河や岩にせかるゝ音すなり上は流のさゝみやされの瀬

はかなしてふや難波あし原のやき塩も是も例あり又はや我代
そふまでふるくハおしてる難波つきねふ山城そらみつ大和

とのみもよめりさるを右の係格よりはなれてみだりに
手爾をは世の人おしてるやに係結をとりかけて 大かたやてにをは
是て 川風やなどもうみたといひかけりにてにをは のひ
かるましといふべし

やは何もは　やはつゞきかの下よ疑の詞をおける格

古　春霞たてるやいづこみよしのゝよしのゝ山に雪はふりつゝ

新　咲やこの花にたれぬれたる風さふきまちけよきかみるひまそとも

体言にて　しとをめてるや　　落句の体言よ何ナラント云て受べし　俚言が　何ヂヤリウナ

古　谷川はとくる氷のひま毎に打出る浪や春の初花ナミガ　ハルノ初花ヂヤリウナ

後　いかにとしく心あるなる恋や富士の高ねにかゝる白雲リガコヒガ　シラクモヂヤリウナ

いひかけて　とめたるや

新　かゝりきゝ秋の夜つくやたつ田山嵐あくぬ枝ふく嵐ふくし
カクミヤタツト一ヒカケテドヂメタ

於　年まつのかくてやつひふ四みの夜の老のひまめてぬ人のさめかは
カクテヤ止リヤミ二イヒカケテトヂメタリ



あれや　　俗言にかく是はなりやの意なりんと此指まつそれにもう　俚言　チヤリウナ

古　秋の野におくしら露は玉なれやつらぬきかくる蜘のいとすぢ　タマヂヤリウナ

後　るゝおいものゝえくずれ出るれや入ゆし人のちる信もせぬ　ヤマヂヤウヤナ

ぞや　　推量の辞なり　　六種詞の第五等にと係用の辞の第三格とよかく　俚言て　何バニヤ

古　この川に紅葉をさよしかつてぞや物様つらの秋とてまつ　リクセバニヤ

月　夕されは野よりけふも雁の来と老の人徐ぞや人の何まこなまよ　ミ子バニヤ

だや　　五種詞の第一等よかく　俚言　何タイモノヂヤ

月　さかきはで鳴はふりまぐほとおきはまざまきの杉の葉をとき　キヽタイニヂヤ　何タラナア

手　それなかの志をそれし神を特ちてぬあるだや人よるむを見えたてく

用語と体言との中ある意なる　や　アツタラナア　これはとりしころく助字とえておよくべし

新　夕月夜さぞや松辺の杉の色にやつとおまちぬ道をさそる哉



[library seal]

古
ほとゝぎすやさつきのあやめ草よりや哀まさしぬ恋ぞまさるわれ
はなさくやうのはなうつやきぬさぬるや袖ぞなをしたまふ

そゝや　俚言　りりや

新
いつしかと萩の葉むけの片よりにそゝや秋とぞ風もきこゆる
是ハやよとぞかけまいつりや（リリヤ）と俳ぐみするやく丸なるさ

やよや　俚言　コレノウ

古
やよや（コレノウ）まてやまほとゝぎすことづてむ我世の中にすみわびぬとよ

新
やよしぐれ（コレノウ）物思ふ袖のなかりせば木葉の後に何をそめまし

やゝ　是ハ歎きの意也　俚言　ソロソロ

於
萩の花ちるやゝ（ソロソロ）もちそふ風とあるたなし一夜ねのまさるらん

や　是ハ体ニてよま又ゝなやかなし辞ほか解かる
あれや　又あなや歎息の辞也
俚言　何ヂイナウ

牡
あそれなる見る人果や（ハテヅイナウ）はなもとりつるかひのくも霧とおもへて

詞
郭れし床のまつのみも萩の枝乃まはぎの宿のいさゝこの世や（ヨヅイナウ）

後拾
いかにせんあれあやふく（アニクタラレイ春ノ日ギヤヅイナウ）は中の月や夜すのいまきさのらましかば

千
五月雨ハ岩のまし川くふ神ぬれてあれ（アミレホタレタウキヤ子ギヤヅイナウ）たるれの浪のうきねや

後
志ら川の瀬のいとみえすはれれとみとりに袖さへせじあとや（根ニヨスマイギヤヅイナウ）

金
池まもせきこそ良ろ八落をまつのとりうへせへ柏まあらずれや（取カヘス物ギヤツタラコガラウヅイ人ヲウラミハスマイ）へをかほし哉歟乃

そゝや
是ハそゝやの意のつまのかとくよあり此よありまたや
玉のくらそこするたや　上古の字ハいとし
てはをさなり

於
君がためむ希の梢のゆくしとかくらしみそてふかへりこしぞや

六百番
夜川ろ五月まゐしせばとめハ十体のをそ角さむそてや

めや
是ハやはのやまめのそへらる也 反語の辞なり 五種詞の其一
等なく

古
植しうへば秋なき時や咲ざらん花こそちらめ根さへ枯めや
ハナハチリモセウガ根マデ枯ヤウカ枯ハスマイ

日
秋なれバ山とよむまで鳴鹿に我おとらめやひとりぬる夜ハ
シカニオトラウカオトリハスマイ

めやハ　是ハ次上のめやとハぞの辞のそひたる事なし

日
種しあれバ岩にも松ハ生にけり恋をしこひバあはざらめやも
コヒタウヘニモコヒタラバ逢ヌト云コトハ有マイ

日
みよしのゝ大川のへの藤浪のなみに思はゞ我恋めやハ
ナミニ思フナラバコノヤウニワガコヒハスマイ

日
山科の音羽の瀧の音にのみ人のしるべく我恋めやも
ヒトノシルホドニワガ恋ヲシレタカイシレハセヌモノヲ

新
今更に雪ふらめやもかげろふのもゆる春日と成にしものを
イマサラ雪ガフラウカイフリハスマイ

既にもめやもの辞の事ハいへるがごとし　是にて古語の[illegible]ハ[illegible]

古
津の國のなにはの葦のめもはるにしげき我恋人しるらめや
ヒトカシラウカイシレハスマイ

後拾
[illegible]や[illegible]て人目をもるかりの宿に[illegible]
イカレラウカ[illegible]リハスマイ

やも　こゝろ[illegible]て　[illegible]古語の[illegible]

古
吹風と谷の水とし無かりせばみ山がくれの花を見ましや
ソレハ花ニヂデモフレタカイフレハセヌノニ

日
[illegible]関やしきゐて山川の[illegible]
[illegible]イカヾ[illegible]

えやハ　次上のめやとハぞの[illegible]　是も古語の辞なり
俚言　ドウモエウ

後
[illegible]

新
[illegible]
[illegible]ニカクレテシノブカドウモエウ[illegible]

さやは　俚言　サウハ
[illegible]

拾
[illegible]の[illegible]山[illegible]
見セヤウト思フガドウモエウミセヌ

あ[illegible]心[illegible]
サウワビシイコヲ見タカイ見セナンダ

やの意のやハ　是ハやの意にて古語にあふれ[illegible]
サウハチキツタカイチギリハセヌ

古
[illegible]
俚言[illegible]

拾
[illegible]

きや

これはきやてふの意にて反借の辞なり 必下にかへりてきく格なり 落句によめるは[illegible]

古 思ひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせんとは。
オモフタカイ 思ヒハセヌニ

新 契りきやあかぬ別れに露おきし暁ばかり形見なれとは。
チギッタカイ チギリハセヌニ

落句にあるきや

是はくはとの辞を添て落句にある[illegible] いづれも次上と大かた同し

後 [illegible]一枝の[illegible]もひかけきや

新 浅茅原はかなくおきし草のうへの露をかたみと思ひかけきや
思ヒガケタカイ オモヒカケハセヌニ
次上ニオナシ

よ

是は感慨の意なり
俚言 ワイノウサテく

後 [illegible]をたの[illegible]よ
コレホソイコワイノウサテく

拾 [illegible]
思へばよ[illegible] 歎くよ[illegible]と[illegible]
マロ子ワイノウサテく

俗語にサヤウノコハヨモ有ベイカと[illegible]

後拾 [illegible]山科の[illegible]



続古 つひの道[illegible]

てよ

あとに合せるあつかひ 俚言 何テクレヨ

古 久方のあまのかはらのわたしもり君わたりなばかぢかくしてよ。
カクシテクレヨ

ら

[illegible] 俚言 何ヒリウニ

月 [illegible]
ルカシリウニ

らし

五種詞の中三等にかく一段の活用には第一等にかく[illegible]

月 [illegible]

月 みよしのの山の白雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり
白雪ガツモルソウナ
モウマサルソウナ

下 さ夜中と夜はふけぬらしかりがねのきこゆる空に月わたる見ゆ
ヨハフケタソウナ

一段の活用の中一等にうけるらし

[illegible]

ささふおあひさるらし　此さるハかの意とす也

古　ぬきみだる人こそあるらし（ヌキミダス人ガアルソウナ）白玉のまなくもちるか袖のせばきに

後　松の緑の色の音ふくをまさせてハ竜田姫こそ（タツタヒメガ秋ハ引ソウナ）秋ハひくらし

新　ほのぼのと春こそ空に来にけらし（ハルガソラニキタソウナ）天の香具山霞たなびく

なをとる月を待るなとしふもハ常のをたちり今さらに
あるいさぬいあらぬくましのつらひぞあるとらぶむらし

俚言　何ノニ

さと

後　天の川後のしがらみ遠ければ（トホイノニ）とらめもしらぬ舟出悲しれ

古　雪とのみ降るだにあるを（雪トフルサヘアルノニ）桜花いかに散れとか風の吹くらん

俳言ノ通ふる格　俚言　ヂヤノニ

日　暮るるかと見れば明けぬる夏の夜を（ヨヂヤノニ）あかずとやなく山ほととぎす

日　白露の色はひとつを（ヒトツヂヤノニ）いかにして秋の木の葉をちぢに染むらん



さと

此ハさとはいへども意あれど是ハ悲し下にむ乃結をさそる格也　俚言　ナリトモ

日　萩が花散るらん小野の露霜にぬれてをゆかん（ヌレテナリトモユカウ）小夜は更くとも

新　君があたり見つつを居らん（ミテナリトモヲラウ）伊駒山雲なかくしそ雨はふるとも

古　立とまり見てをわたらん（ミテナリトモワタラウ）紅葉ばは雨とふるとも水はまさらじ

さと

是ハ下知（おほせ）の辞をつよく云ふ也

於　ゆふされば来かかる袖ハかはらしもさへみえてあふ人をとれ（トレラサンセ）

万　宇治川を舟わたせをと（舟ワタシテクレヨ）よばへども聞えざるらしかぢの音もせず

まかきして〳〵の親梅花園の芝蘭ばかりにて上々
もと浮野にて出来仏の世にあらはれ給ひ玄奘
拝み奉る其とい訓て久須志の尊をあらはせし蔵
わしまもなき世また二人とれしもなきたる女菩薩を
得めをみ由縁の花の露つ久堅の繁継の御獄まて戦
死の後かりやこうら彼の地にしおきまれしやわ
て翁とあはて訓らのみ世にまたそれを写
めしそれ繭縁すめとれ翁いてさまかして

山城の国宇治の縣なる黄檗院乃静智律師は
の門よりて悟道し実道といふの名あるゆかりて
法の流をあらためて文章を経歴にひとつにまとめて
何字を記しつきたる謹字師とよばれし人ありし
らさに円珠菴の妻評 駿府の古渕本居宣
長大人なとの物せられし動あるなよりめて萱
のいさゝか書の学しきりて年々しきりに尊びさ酒
きゝ流されでものゝ字流に通ふ千年の世ちりびとにまで



かく書きてまかりし之許渭天作名波斯におのれの
旅の修格あるひて料にふまえて書数
さしそのまゝを記しまゐらするむねとは古波の柳原
まつりさまに語りしたりし画士の此段に縁も
ところにありし形をとり俚言ともいふを縁
さゝ慕ふるありまして学者のともがら隣てよ
是の背に流さし種子の世説まうふのことを
おのれも字も傳誓ともともろう中には高字

鳥とし手を斗とあやする重きもあき
尓しもあり杖ハおらを正き世話いくださま
かへ生とて周し門を拝へるを つまと紐
もくり波鬘めて板を押しあゐ事とふ系め
ゆゆめく湖のみつのり俣とわこの木ぬせいき
しまは流るまみ世話
夏野栄花書ゐ



彩影葉の名葉　小冊二巻　近刻
此集ハ梅花園蓮舎圖ふ歌番り名たる人々の歌ハいふにも
更なり野の末山のの花を写されしもさいはひ築つ哉
さくりおあくく搗つくらまたるなり


版權免許　明治十二年三月廿九日

著述者　京都府下
下京區第七組大黒町百五十七番地
拜郷蓮茵
拜郷慈兄同居

出版人　京都府下平民
下京區第六組三文字町
福井[illegible]

まいえしあき
くたさるよ
つこ